

2020年6月10日

コヘレトの言葉とコロナウィルス感染について

遠藤清賢

近所のスーパーの中にある書店にNHK Eテレのテキストがまとめられているコーナーがあり、「こころの時代」という番組で使用される「コヘレトの言葉」がテーマになっているテキストがありました。この書は聖書の中で特に独特の文章が綴られています。私にとって信仰を持った学生の時からこの書は異彩を放っていました。その頃は口語訳聖書で「伝道の書」という表題でしたが、共同訳聖書になってから「コヘレトの言葉」という表題に替えられていました。はじめに仏教の経典のような文書があり、非常に興味をそそられていました。人間の行い、その人生はすべて空しいということから始まるのです。生きることに何の意味もなく全ては風のように空しく過ぎ去っていくのが人間の人生であるというのです、これをそのまま解釈すれば生きる時間は何の意味もなく、何をしてもすべては無駄なことだという内容になるのです。しかし、全てが空しいといいながら、全てに時があること、飲み食いし、妻と共に人生を楽しめとか、汝の若いときに汝の作り主を覚えよ、という記述があることが、何とも不思議なのです。この書は私たちに何を語っているのか、神様は我々に何を求めているのか分からないまま読んでいたことを思い出しました。

この「こころの時代」の講師として小友聡先生の名前が記載してありました。今回の新共同訳聖書の翻訳者の一人でもあり、2018年度行われた奥羽教区の新共同訳聖書の研修会に講師として来てくださった先生でもあるのです。迷わずこのテキストを購入したのです。とても興味深く読ませていただきました。その中で私は「空」という言葉がどのような意味なのか分かりませんでした。口語訳聖書は「空」と表現されています。共同訳聖書は「空しい」と変えられました。しかし、新共同訳聖書は「空しい」ではなく再び「空」という表現に戻っています。どうしてその表現になったのか先生の解説では「空」とは「束の間」「一瞬」という意味であるということでした。このように解釈すると、人生は一瞬であるから、その時間を思う存分に楽しみなさいというふうに理解することができるかと書かれているのです。人間一人の人生は束の間であり、風のように空しくではなく、一瞬のうちに過ぎ去ってしまうのだということだったのです。そのように解釈するとこの書のすべての矛盾が、矛盾ではなく神様の励ましとして捉えることができるのです。短い人生であるからこそ時間を大切に、神様の恵みとして愛する人と共に楽しむのが人間としての生き方であるということが明確に心に入ってくるのです。人生は空しく暗闇の中を生

きるのではなく、束の間の人生を大切に、楽しんで生きなさいと神様が言っているのです。旧約聖書のなかで貫かれている厳格な神様の姿が、優しくおおらかな神様の姿で想像できるのです。改めてこの人生を生きようという思いが湧いてくるのです。私は多くの恵みを頂いてきました。神様は私のような罪深い土の器であっても支え続けていて下さることを確信することができるのです。

コロナウィルスの感染拡大によって私たちの生活は大きく変化しました。特に他者との接触に気を付けなければならない社会になってしまいました。感染した人は隔離され、感染者の多い地域では行動が規制されている所もあります。日本では個人の意思によって行動を規制していますが、国家が厳しく行動制限を強制している国もあります。ロックアウトして都市全体の外出を厳しく規制したところもあります。東京大学准教授である國分功一郎という哲学者がテレビで話していました。現代社会の刑罰は個人の行動を制限することが刑罰になっていて、一般的な刑罰は狭い空間に長時間閉じ込めることなのです。このようにコロナによって自由な移動が制限され、自宅に閉じ込められるというのは罪人に与えられる刑罰と同じことだと言っていました。有効な薬やワクチンのないこのウィルスの対処方法は接触しない、近づかないことが唯一の手段となっています。私たちが最優先に考えるのは生存する、生き続けることであり、生きているということが人間であることの最も重要なことだとみんな思っています。しかも自分だけが生き続けるという利己的な思いがますます増殖し生存することを最優先に考えるということは本当に正しいことなのかと國分先生は私たちに問うていました。さらに先生は語っていました。私たちの世の中は、とくに先進国では命を最優先する社会になり、生き続けることをもっとも重要なこととして捉える社会になってしまいました。しかし、全員が生き続けるというのではなく一部の人間が特権を持ったものが生き続けることができるという社会になってしまうことにこの國分先生は違和感、また危機感を感じているとも話しています。そして死者の権利がないがしろになっていることも付け加えていました。イタリアのジョルジョ・アガンベンという哲学者が、このことを強く嘆いているのだそうです。感染して死んだ人間は家族と面会することなくそのまま孤独の中で死に、そして埋葬されます。それは死者への冒瀆であり、人間性を無視しその人が生存したことさえも消滅させようとする行為のようだと語っているのだそうです。命の継承がコロナによる死によって分断させてしまうのだということなのでしょう。人間の命への尊厳は、生存最優先の考えによって消滅してしまうのではないかという考えなのかもしれません。生存の格差が拡大し、貧困者は死んで当然のような社会になってしまったら人間社会は退化し、今まで構築してきた、優しさや命の尊厳という人間が歴史の中で培ってきた文化は崩壊し人間の命は衰退の一途をたどることになるのではないかという危機感を持っているのです。世界のい

たるところでは人間は自分の命を守ることに汲々としています。他者のことを考える余裕等全くない地域もあるのです。手を洗うためのきれいな水がない地域もあります。戦いに明け暮れ毎日戦争をしている地域もあります。その中で多くの人たちが毎日どうしたら生きることができるのか希望もなく絶望の中で生活しているのです。戦争で命を落とす人、コロナに感染しても救済できないで死んでしまう人が数えきれないほどたくさんいるのです。私たちの愚かな行為と抑えることのできない欲望の結果がこのような世の中にしてしまったのだと思います。そしてコロナウィルスの感染は私たちに難しい課題を突き付けているのです。

コヘレトは言っています。確かに人の命は儂く、生存する時間は一瞬であるかもしれません。そして命は取り戻すことができません。死んでしまったらすべては終わりであると誰もが思っています。しかし、人間は如何に生きるのか、どうすればより良く生きることができているのかを考えなくなったら私たちが生存する意味はなくなってしまおうでしょう。神様は人間に命の息を与えた意味はなんであるのか、この儂い人生の中で探求しなければならないと語っているのです。そして儂い命の継承と今まで繋がってきた命の連続の中で真の命の在り方を見つけ、次の世代に手渡すために神は人間を創造されたことを確認しなければならないのです。この書の中で一貫しているテーマは生きるということです。儂く、一瞬で終わってしまう命を喜び、楽しみ、その時を大切に過ごすことが人間に与えられている恵みであるということです。私たちはいま大きな試練が与えられています。このコロナウィルスの中で生きるためにどのような選択をするのか問われているのだと思います。しかし、生きていることを喜び、楽しむためには、利己的であっては決して現状を打開することはできないでしょう。人間の命は、多くの人と共に喜び、楽しむことによって、自分自身の命も輝きを放つことができるのだと思います。この状態を共に嘆き、この困難な状況を打開する意志を確認し、協力することによって人間は自分自身の命を存続することができます。私たちの命は自分自身の力によって生きているのではなく、多くの命によって支えられ、生かされていることを、そして神様によって生かされていることを絶えず確認することです。争いの中からは何も生まれてきません。信頼と協力、信仰と愛によって新たな喜びに満ちた命が私たちに与えられることを神様は「コヘレトの言葉」を通してメッセージを贈り続けているのです。